

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：32641

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24830080

研究課題名(和文) アダム・スミス以後の経済学とスコットランド・コネクション

研究課題名(英文) The Scottish Political Economy After Adam Smith

研究代表者

荒井 智行 (Arai, Tomoyuki)

中央大学・経済学部・助教

研究者番号：70634103

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、18世紀末以降のスコットランドの教育・社会変動の推移に焦点を当てながら、スチュアートの『経済学講義』第4編「教育」を詳細に分析したほか、複数のマニュスクリプト資料も用いて研究した。これらの研究により、スミスから、エディンバラ大学経済学教授のデュガルド・スチュアートへの経済学と教育との連続性と断続性を示しながら、経済学と教育との結びつきを重んじるスコットランド独自の経済学の特徴を明らかにした。

研究成果の概要(英文)： This study clarified Dugald Stewart's work on education, focusing on the book for the first time, *Of the education of the lower orders* in his *Lectures on Political Economy* (1800-1810). Moreover, referring to several manuscripts related with this study, I illuminated the significance of Stewart's view of the effect of reading and literary education for incentivizing the lower orders.

I described the significance of Stewart's original view of education in the context of the history of economic thought at the turn of nineteenth century in Britain. This shows the historical fact of one characteristics of the Scottish political economy after Adam Smith.

研究分野：経済学

科研費の分科・細目：経済学説・経済思想史

キーワード：アダム・スミス デュガルド・スチュアート 道徳哲学 スコットランド啓蒙 デヴィッド・デイル
工場学校 文芸教育 読書の効果

1. 研究開始当初の背景

本研究は、博士論文『デュガルド・スチュアートの経済思想 アダム・スミス以後の経済学の一展開』(2012年3月)を基礎とし、さらに広い視野の下で行われる発展的研究である。博士論文では、1800年から10年間、スコットランドの地、エディンバラ大学で経済学講義を行ったデュガルド・スチュアート(1753-1828)の『経済学講義』(1800-1810)のテキスト分析を中心に行うことによって、19世紀初頭のスコットランドの経済学・経済思想の特徴を明らかにした。そこでは、スチュアートの人口論、経済理論、穀物貿易論、貧困政策論、教育論等をそれぞれ詳細に検討した。そこで明らかにされたのは以下の2点に集約される。

(1) スチュアートが、スミス自由貿易論を修正し、経済理論だけでなく政策論をも重視した点である。より具体的には、18世紀末の金兌換停止、断続的な凶作、世界的な教育改革などを背景に、スチュアートの経済学には、金融政策や貧困・教育政策に力点が置かれていた点である。

(2) スチュアートの経済学は、人間精神の「陶冶」を目的とする道徳哲学と政治社会の秩序を維持する「政治の科学」とが深く関係していた点を明らかにした。ここでは、『人間精神の哲学要綱』第4章「抽象について」に焦点を当てながら、スチュアートにおける道徳哲学の実践性やベイコン哲学との関連について考察した。

これらの研究成果を基にして、本研究では、スチュアートにおける経済学と教育との関連について考察する。内外の研究では、スチュアートの経済学が注目されるようになってきたにもかかわらず、彼が10年にわたる大学の講義の中で、どのような点を重視したのかといった実態を解明する研究はほとんど行われていない。その結果、スチュアートが教育等の政策を重視した経済学を打ち立てたにもかかわらず、彼は楽観的な自由貿易主義者であったという認識が広く流布されてしまっている。要するに、現状では、スチュアートの『経済学講義』の内容が十分に明らかにされていないにもかかわらず、スチュアート経済学が19世紀初頭のブリテンにおいて果たした役割や影響力だけが高く評価されているのである。

2. 「研究の目的」において示すように、本研究は、スチュアートにおける経済学と教育に特に焦点を当てて考察するものである。スチュアートの教育論それ自体の研究は、ほとんどなされてこなかった。これまでの内外の研究では、スチュアートが「国民教育制度の確立」を重んじた点について触れているが、これを彼の楽観主義に還元しようとしてきた。また、スミス以後の経済学の展開として、スチュアートの政治経済学が重要な位置を占めているとする研究も存在するが、スチュ

アートの教育論それ自体についてほとんど触れていない。さらに、スチュアートの道徳哲学における教育重視の思想を特徴づけている研究もあるが、『経済学講義』第4編の「下層階級の教育について」の考察まで及んでいるわけではないのである。

そうした内外の研究状況の中で、本研究では、スチュアートの『経済学講義』や内外で発見されていない重要「書簡」を発掘し、未公開資料の分析をも行う。

上述したこれまでの主な研究

Winch, D. 1983. "The System of the North: Dugald Stewart and his Pupils", in *That Noble Science of Politics: A Study in Nineteenth Century Intellectual History*, eds., S. Collini, D. Winch, J. Burrow, Cambridge, Cambridge University Press.

Hont, I. 2005. *Jealousy of Trade*, Cambridge, Massachusetts, and London, Harvard University Press.

Milgate, M. and Stimson, S. C. 2009. *After Adam Smith: A Century of Transformation in Politics and Political Economy*, Princeton and Oxford, Princeton University Press.

篠原久. 2008. 「啓蒙の『形而上学』と経済学の形成 ドゥーガルド・ステュアートと『精神の耕作』」田中秀夫編『啓蒙のエピステーメーと経済学の生誕』京都大学学術出版会.

2. 研究の目的

本研究は、イングランドとは異なる、スミスからデュガルド・スチュアート(両者ともスコットランドのエディンバラ出身)へのスコットランド独自の経済学の系譜についての新たな仮説の試みを意図している。アダム・スミスの経済学が、1800年にエディンバラ大学で、世界で最初に経済学の独立講義を行ったスチュアートの経済学にいかに関与されたのかを跡づけることを目的としている。

本研究では、上述したデュガルド・スチュアートの道徳哲学における教育重視の思想が、道徳哲学に収まらずに政治経済学講義の「教育」という場においていかに貫かれているのかを見出すことを目的としている。そうした本研究の目的には、スミスからリカードへの経済学史の流れの中で、経済学において教育が重要な意味をもっていた点を示すことを意図している。スミスが『国富論』において教育の重要性を論じたことは、経済学の原点において、経済学と教育との関わりが決して無視できないことを示しているものといえる。だが、スミス以後の経済学は、特

にリカードの経済学が象徴するように、スコットランドからイングランドに南下し、より高度に専門化された。この時代についてのこれまでの研究においても、経済学の理論的発展の側面に特に関心が払われる一方で、経済学と教育との関わりについては、十分に検討されてこなかった。こうした問題意識から、スチュアートの教育論の再構成を通じて、スミス以後の経済学においても、経済学との関わりで教育がなお重んじられていた事実を示すことが重要であると考えている。

3. 研究の方法

(1). 公刊されたジャーナルや出版物の分析だけでなく、エディンバラ大学図書館やスコットランド国立図書館等に所蔵されている、19世紀前半のスチュアートの教育思想や、その当時の背景をなす教育についての各種の書簡類などの未公開資料の調査を通じて、当時のスコットランドにおけるコンテキストを復元するという方法を採用する。

(2). 18世紀末以降のスコットランドの経済・社会変動の推移を、一次・二次文献を駆使しながら、スチュアートの教育政策を具体的に検討する。特に、『経済学講義』第4編「下層階級の教育について」を詳細に分析することである。

(3). 産業革命の幕開けとなる18世紀末以降のスコットランドの経済・社会変動の推移を、一次・二次文献を駆使しながら、スチュアートの政策論（特に教育政策）を具体的に検討する。ここでは、経済史、社会史ならび教育思想史等の隣接する分野にも研究範囲を広げ精査する。

(4). 研究プロセスにおいて、本研究の枠組みの有効性や問題点を明確にするために、内外の研究員にも本研究に助成頂くことにする。また、資料分析を行いながら、新たな知見や仮説の修正が生じる場合や、内外の学会報告において、各研究者から研究代表者の研究成果の修正を求められる可能性も生じよう。そのような場合には、適宜、学会や共同研究で御一緒する各研究者と相互に連絡を取り合いながら、問題点の克服に努める。

また、中央大学経済研究所の公開研究会を行いながら、研究協力者の助言を随時仰いでいく。中央大学の只腰親和教授および益永淳准教授や学外の研究者からのアドヴァイスを受けることにする。

(5). 個別的な論点について結論が得られた場合は、研究会や学会報告を基にして、学術誌に論文投稿を行うことにより、研究目的を遂行する。

4. 研究成果

本研究では、スミスから、エディンバラ大学経済学教授のデュガルド・スチュアートへの経済学と教育との連続性と断続性を示しながら、経済学と教育との結びつきを重んじるスコットランド独自の経済学の展開を明らかにした。18世紀末以降のスコットランドの教育・社会変動の推移に焦点を当てながら、スチュアートの『経済学講義』第4編「教育」を詳細に分析したのに加え、複数のマニュスクリプト資料を扱うことにより、これまでの内外の研究よりも、スミス以後の経済学と教育とのつながりが重要な意味と意義を持つことを示した。

本研究により得られた成果の位置づけとインパクトは以下の通りである。

(1). スチュアートが、18世紀末以降の世界的な教育のトレンドの変化をいかに認識していたのかを、エディンバラ大学図書館で資料調査した「書簡」類を用いて考察した。例えば、「トマス・ジェファソンからの手紙」(1803年12月21日 Jefferson, T. 1803. *Letter of Thomas Jefferson Copied out for D. S. by the Earl of Buchan*, 21 December, University of Edinburgh Library, Dc.6. 111, 83-84)の中で、ジェファソンがロンドンのモニトリアル教育制度を高く評価していたことから、スチュアートがその制度がいかに優れているかをよく知っていたことや、「フランシス・ホーナーからの手紙」(1805年、4月6日 Horner, F. 1805. *Letter to Dugald Stewart*, 6 April, Edinburgh, University of Edinburgh Library, Phot.1717)から、その制度の具体的内容を知ることになった点を論文の中で明示した。特に、後者の「書簡」は『経済学講義』第4編「教育」の内容では省略されている重要な内容が記されていただけに、本研究において大きな発見であった(これらの「書簡」の分析は、内外の研究でも示されていない)。これは、エディンバラ大学図書館での資料調査と資料分析による成果としてあげられる。

(2) 18世紀末以降における諸外国の学校改革などへのスチュアートの注目を通じて、教育改革を意図した彼の教育論の基本的特徴を示した。特に、スチュアートの教育論において、読書の効果が重要な意味をもっていた点を明らかにした。読書の効果については、(1)で指摘した「フランシス・ホーナー」からの手紙による図書館の普及の効果のほか、スチュアートが、ニュー・ラナークのデヴィッド・デイルから影響を受けていた点を示した。後者については、スチュアートが、デイルの工場学校から、工場労働者の教育にいかん注意を払ったのかを考察した。スチュアートは、読書が工場労働者を含めた下層階級全体の知的な改善に与える効果を強調した。その本質的な理由には、読書が、怠惰や

犯罪の防止の効果だけでなく、人々の「道徳心」や「勤労」に励む効果をももつと考えられたからであった。彼によれば、十分な休息や気晴らしの時間が確保されれば、読書は、工場労働者の「精神」を「涵養」し、「節約し勤労するためのもっとも安定し強力な動機を彼らに生じさせるのである。すなわちスチュアートにおいて、労働問題は、労働時間の短縮や休息時間の増加に加えて、読書を通じた彼らの知的な改善を推進する方向で解決されなければならないと考えられていた。これは、スミスが『国富論』の中で労働時間の短縮と関わらせながら教育の重要性について論じなかったことから、スミス以後の教育の議論の重要な変化であった。

(3). スチュアートの教育論において、文芸教育が重んじられていた点を特徴づけた点も本研究の大きな成果である。彼において、若年期の子供たちがさまざまな文芸を学ぶことによって「精神上の無限に多様な能力」を育むことは、何よりも重要性であるとされていた。文芸の学びによって「多様な能力」を育むことを可能にすると言うこうしたスチュアートの考えは、スミスの教育観との類似性を見出すことができる。スミスは、『道徳感情論』において、スチュアートと同様に、詩や音楽などの文芸が人々の感情に与える良い影響について何度か論じている。また、スミスの遺著である『哲学論文集』では、それらの文芸のうち、「詩や雄弁は常に、さまざまな思考や観念が多様性と連続性を保ちながら結合されることにより、その効果を生みだす」と述べてもいる。文芸が人々の精神や思考に与える効果に関するこのようなスミスの主張は、スチュアートの論述ときわめて類似している。だが、スミスは、スチュアートのように文芸教育の必要についてまで主張しているわけではない。スミスの『法学講義』から『国富論』にかけて、教育の議論の内容はたしかに質的にも量的にも拡充されているが、いずれも基本的には読み書きの達成が当面の問題にされているにすぎない。その理由の1つとして考えられるのは、スミスのいた1750年のイングランドでは成人の識字率がおよそ半分にすぎなかったように、スミスにおいては、識字率を上げることがスチュアート以上に急務の課題とされていたからであった。

これに対して、世紀転換期を境に、モニトリアル制度の普及や識字率の上昇が見られる中で、スチュアートには、初等教育の中に、読み書きなどに加えて文芸教育をつけ加えるかどうかを考える余裕があった。また、工場労働に従事する前に子供たちが文芸を学ぶ必要があると述べてられていたように、スチュアートにおいては文芸教育の必要への強いこだわりがあった。文芸教育の必要を要求するスチュアートの強い意

志には、人間精神の哲学を重んじるスチュアートの道徳哲学にとって、文芸教育が人々の知的道徳的改善において計り知れない効果をもつと考えられているからであった。

(4). 「動機づけ」を重んじるスチュアートの道徳哲学が、『講義』の教育論においていかなる特徴をもって論じられているのかを明らかにした。人間精神の哲学に属する教育は、「政治経済学のもっとも重要な対象」と深く関わると述べられているように、スチュアートにおいて、教育は、人間精神の哲学と政治経済学と相互に密接に関連する主題とされている。そうした彼の教育論には、それらの相互のつながりを媒介するものとして、「動機づけ」が重要な意味をもっている。というのも、政治経済学講義におけるスチュアートの教育論では、勤労に励む「努力」や「道徳心」を身につけるための「動機づけ」が、人々の知的な改善や社会の改善のうえで不可欠なものとされていたからである。デンマークや米国などで見られた、無料もしくは安価な授業料や優秀な学生への奨学金制度、教区学校よりも「子供たちの競争心により大きな活気を与えている」モニトリアル制度、ホーナーによって述べられた図書館を利用する子供たちの自発的な読書、ならびに、子供たちのさらなる知的好奇心の向上が望まれるとする文芸教育は、いずれも勤労心の向上や「動機づけ」に関わる教育上の重要な論点とされていた。もし、人々が「動機づけ」を失えば、日常生活で生きていくための勤労意欲を失い、怠惰やモラルの腐敗を招くことになる。そのことは、ひいては社会の平穏や秩序を乱すことになる。「政治社会の幸福と改善」を目的とすることが彼の政治経済学の定義であるように、人々が「動機づけ」を持ち続けることは、彼の政治経済学において肝心なのであった。

スチュアートがそのような「動機づけ」を重んじる根本的な理由には、人々が、それを通じて人間精神を鼓舞し、先入見や誤った思考を正す「徳の権威」を身につけることができると考えられていたからであった。そして、スチュアートの道徳哲学においては、目下の商業社会の発展と科学の進歩と関わらせながら、人間精神の哲学を発展させるための実践的な教育の議論が重んじられていた。ここでは、実践性を志向するスチュアートの道徳哲学の特徴を明示した。

(5). (1) ~ (4) までの考察を通じて本研究全体の成果として示されることは、次の点である。スチュアートは、世界的な商業社会の繁栄や科学の発達、それが直ちにあらゆる人々の知的道徳的改善に有効に作用すると必ずしも楽観的に考えていたわけではなかったという点である。目下の前進しつつあるブリテン社会において商業発展や知識の

普及が見られるとしても、下層階級の教育が何よりも重要であるとされていた。たとえ主要道路が拡大し各地域に出版物や図書館が普及したとしても、長時間労働や過重労働で読書に当てる余力や時間すらない一般の工場労働者たちには、諸外国との商業交易や社会的な交流といった商業社会の恩恵に与ることができない。スチュアートは、この点を強く認識し、進歩的な商業社会における教育的作用では行き届かない過酷な労働状況に置かれている労働者たちの教育的改善に特に注意を払っていた。学校改革や文芸教育に加えて、工場の労働時間の短縮と関わらせながら工場労働者たちの自由な読書や演劇の観賞などの必要にまで言及されていたことは、スチュアートの幅広い社会認識を十分に示すものである。19世紀初頭のブリテンでは、経済や商業が著しく発展する一方で、モントリアル制度などに見られる下層階級のための学校が整備されつつある時代であった。スチュアートは、商業社会の発展の陰で、工場問題などの現実的な面にまで目を向けながら実際の教育対策を展開した。こうした事実は、楽観的な人物として描かれた従来のスチュアート像とは大きく異なるものである。

(6). 以上の考察から、スチュアートの教育論全体の研究成果を以下に示す。スチュアートは、世界的な教育改革の進行や出版物および図書館の普及など、社会の著しい変化に対して目を向けながら、新たな教育のあり方を模索していた。そこで論じられていたのが、文芸教育や読書の効果であった。彼がこれらの教育や読書を重視したのは、さまざまな要因があったものの、根源的には人間精神の哲学を重んじる彼の道徳哲学が深く関係していたからであった。そして教育を根幹に据えるそうした彼の道徳哲学は、政治経済学にも及ぶものとされていた。

スチュアートの教育論において特筆すべき点は、教育に重きを置く道徳哲学を柱にしながらも、実際の経済や社会の流れを敏感に捉えて教育が論じられていたことである。特に、現実の進歩的な商業社会だけでなく、眼前の厳しい労働社会と関わらせながら教育が論じられていたことは、注目に値する。というのも、スチュアートの教育論については、これまで前者に力点が置かれるあまり、進歩的で楽観的な教育思想のみを土台にして論じられているとみなされてきたからである。これに対して、スチュアートの教育論には、下層の工場労働者や児童労働者の知的な改善が、スミス以上にさらに重要なテーマとして考えられていた。スミスの教育論もスチュアートの教育論もともに、労働問題と関わらせながら人々の思考の育成や知的な改善を重視する点では共通する面もある。だが、スミスが文芸教育や工場労働者の読書の効果などについてまで言及していなかったように、双方の教育論は、実践的な教育論議にお

いて、その内容を異にしていた。また、労働時間の短縮なしには労働者の知的改善は望めないとするスチュアートの主張は、スミスの教育論には見られないものである。これらの点から、『講義』におけるスチュアートの教育論は、スミス教育論における政策論的側面をさらに推し進めたといえることができる。

これらの点から、スチュアートは、「動機づけ」などについての彼の道徳哲学的信念を貫きながら、現実社会との関わりで教育論を展開したといえることができる。そのようなスチュアートの教育論は、スミス以後の経済学を考えるうえでも、有益な手がかりを与えている。経済学は「数学のような精密科学」であると論じたりカードウにとって、教育は自身の研究対象として見ることはなかった。これに対して、マルサスは、『人口論』において、たしかに下層階級の教育の必要について触れている。だが、その内容は、下層階級に自発的な人口抑制を促すことが特に目的とされており、スチュアートが述べたような教育制度や学校教育の内容についてまで踏み込んで議論されているわけではない。

その一方で、スミスと同じスコットランドで、経済学の範囲の中に「教育」を採り入れたスチュアートの政治経済学は、教育が重要な位置を占めることになった。そこには、スチュアートの教育論が、マルサスやリカードウにはない、彼独自の道徳哲学によって裏打ちされていることが大いに関係しているといえることができる。

(7). スミス以後の経済学において、経済理論的側面のみが発展したとする従来の見解に対して、スコットランド独自の経済学の考え方を示した点で、マルサスとリカードウに偏りがちなこの時代の当該分野の研究を拡張させるインパクトを与えた。また、これまでの内外の研究において、デュガルド・スチュアートの教育論それ自体についても十分に明らかにされてこなかった中で、本研究がスチュアートの教育論の意味と意義を示したことは、内外の学会においても貢献をもつものである。上述したように、当該年度の研究期間の中で、スチュアートの『経済学講義』第4編「下層階級の教育について」の全容を示すだけでなく、複数のマニュスクリプト資料を用いて研究したことは、当該研究の質の精度を高める効果を持つものといえる。この点で、19世紀前半のスコットランドの経済学の可能性を示した点でも、この分野の研究を拡張させる効果をもつものといえる。

(8). スミスからスチュアートへの教育論の比較・検討により、両者において、文芸教育や労働と教育との視点の違いを明らかにすることにより、18世紀から19世紀前半の経済学における教育のもつ意味の変化を明示した。これにより、スミス以後の経済学の中で、教育のあり方もまた重要な意味を持つ意

義を示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

荒井智行, 「D. スチュアートにおける経済学の目的, 方法, 範囲」, 『経済学論纂』(中央大学), 査読有り, 第54巻, 第3・4合併号, 2014年3月, pp.1-14.

荒井智行, 「デュガルド・スチュアートにおける経済学と教育」, 『経済学史研究』(経済学史学会), 査読有り, 第55巻, 第2号, 2014年1月, pp.73-91.

〔学会発表〕(計4件)

荒井智行, 「一次資料に見るフランシス・ジェフリとマルサス」, マルサス「書簡」研究会, 2013年11月, 福岡大学.

荒井智行, 「19世紀初頭におけるスコットランドの人口論 ハミルトン版『講義』と『学生ノート』の比較を中心に」, 経済学史学会, 2013年5月, 関西大学.

荒井智行, 「書簡」を中心とする資料調査によるマルサスとジェフリ, ホーナー」, マルサス「書簡」研究会, 2012年11月, 福岡大学.

荒井智行, 「スコットランド啓蒙末期における教育論の展開 スミスからD. スチュアートへ」, 社会思想史学会, 2012年10月, 一橋大学.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者 荒井智行 (Tomoyuki Arai)
中央大学・経済学部・助教

研究者番号: 70634103

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号: